

2019
おもろ
チャレンジ

国際的ジェネラリストとしての医師を志して

医学部 6年

井上 令一

アメリカ合衆国

2019年8月29日-

2019年10月1日



渡航概要と内容

私は1ヶ月間アメリカ西海岸サンディエゴにあるUCSDに附属するHillcrestとLa Jollaの二つの病院で研修を行った。今回の目的は、私が将来国外でのキャリアを考えたときのその下見と、実習を通して良い推薦状をもらうことだった。

第1・2週目は病棟実習で、朝に患者を診てそれをラウンドで上級医にプレゼンを行う、その他は手技見学、カンファレンスに参加した。第3週目は外来実習で、自分で患者の問診・身体所見を取った後、上級医にプレゼンを行い、フィードバックを受けてから、一緒に患者を診察しに行くというものを行った。第4週目は、病棟実習に戻り、1・2週目と同様な事を行ったが、患者以外についてもテーマを与えられてプレゼンする機会を得た。



渡航中に日本との文化の違い等から苦労したこと

病院の食堂やファーストフードのチェーン店などを除いてどこに行くにもチップを支払う必要があったが、初めはどれくらいのチップを支払えば良いのかわからなかった。また、サンディエゴはゲイの方が多



く、そういう意味で文化の違いを感じた。しかし、トラブルに巻き込まれることはなかった。移動手段においても問題はなく、Uber が大変発達しているおかげで公共交通機関を利用するよりもむしろスムーズに行えた。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

アメリカでの病院実習については、国の違いから多少の差は覚悟していたものの、普段の京都大学での実習経験とはただ言語が異なるだけだとくらいにしか考えていなかったのかもしれない。実際は、医学生という立場でも責任を持って患者を受け持つという意識が、日本に比べてアメリカでは非常に顕著であった。朝のラウンドが始まる前に、患者の身体所見・検査結果・治療方針・今後のプランなど何から何に至るまで、全てを把握し、上級医に発表することが期待されている。そこに医学生だからという理由で妥協は許されないという意識を感じた。僕はそれを捨てきれなかった感もあり、そこが後悔となっている。僕は平均して二人の患者を持っていたが、二人であってもカルテを見て病態を理解するのに相当な時間がかかった。また、患者との会話でも緊張のため自分でも何を言っているのかわからないということが頻繁にあったり、患者の雑談を理解できずその時は笑ってごまかすという日々を繰り返していた。自分なりにラウンドが始まる 2 時間前（朝 6:30）には病院に来て自分の担当患者を診察（プレプレラウンド）した上で、Resident についてプレラウンドを一緒に行い担当患者以外の容態を把握するなど努力はした。しかし、それに対してアメリカの医学生は、一人で 16 人もの患者を見ていたり、やはり患者との会話がとてもスムーズに進められていたり、正直自分の無力さを感じる日々であった事も否めない。

一方で、日々を通して自分のプレゼン力が上達していることを感じられた。今回は患者だけでなく、二つの医学テーマについてプレゼンをする機会もあり、逐一フィードバックをもらえ大変勉強になった。アメリカのプレゼンを重視するその環境は、とても素晴らしいと感じた。

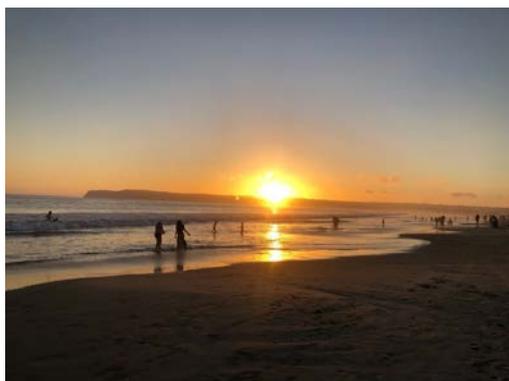
他の点で感じたこととして、患者が多国籍であるという点が挙げられる。サンディエゴはメキシコとの国境が近くスペイン語と英語が入り混じったような街だ。物価の安いメキシコに住み仕事はサンディエゴでという人も少なくない。病院の患者にも特にメキシコ人は多く、3 分の 1 を占めていたと言っても過言ではない。特に年齢層が高くなると、スペイン語しか話せないという人が多かった。そのため、医師の多くはスペイン語も話すことができ、また病棟には遠隔通訳のシステムが備わっていた。医師においても他国出身の方が比較的多く、母国語以外に英語・スペイン語を話せる人が多かつ



た。こうした多様な背景を持つ人たちの中で切磋琢磨できれば素晴らしいと感じた。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回正直想像していたよりも自分の無力さを自覚し劣等感を感じる瞬間が度々あった。そのため本来の目的である推薦状を貰うなどはほぼ不可能に近く自分の仕事の出来栄えから見て決してお願いすることはできなかった。しかしそうは言っても、今回の実習は私の海外でのキャリアをさらに真剣に考える機会になった。現実的に外国人がアメリカで診療することは非常に難しく、年々アメリカの医師国家試験においても外国人が排除される傾向が強まっているとは聞く。しかし私はその困難な壁を乗り越えてみたい。そのためには、英語はもちろん、医学という面で遥かに今よりも向上をしなければならない。来年から医者として世に出ることになるわけだが、その際は研修医だからという理由で妥協することなく、医師として患者を責任持って診るという事を心がけたい。



本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

自分のやりたい事を見つければそれに真っ直ぐ突き進んでください。僕のように厳しい現実を突きつけられても諦める事なく、真っ直ぐ進み続けていれば必ずチャンスは訪れると思います。外国に行った事ない人は、なるべく若いうちに海外に出てください。そして如何に自分が小さな世界で育ってきたかを実感してください。そうすればその経験がこれからの生き方に何かしら影響を与えるはずです。

主な奨学金の用途

- *渡航費
- *宿泊費
- *食費、現地交通費

*海外旅行保険、医療過誤保険、予防接種 など